

驚きの吸血生物（その2）—ヒルの体—

佐々木彰央

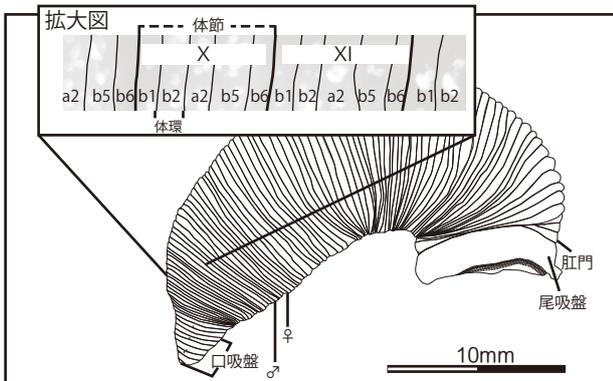


図1 ネンマクビル科の体

ヒルの体をよく観察するといくつものしわがあることに気が付きます。このしわは体節と体環からなり、その位置やヒルの種類によって深さが異なります（図1）。体節とは多くの生物で見られる前後軸に沿ってみられる繰り返し構造のことで、ヒトを含めた脊椎動物の脊椎骨や筋節、昆虫の節などに相当します。体節数は毛蛭目（原始的な構造を備えたヒル）を除く全てのヒル類で34体節と決まっており、極めて発達した筋肉と結合組織によって構成されます。体節はローマ数字で表記することが慣例であり、34体節目のことをX×XIVと表記します。体環は体節を分割した環状の溝の繰り返し構造のことで、その本数は分類群によって異なります。例えば、ヤマビルは1体節に対して5体環ですが、ヨツワクガビルは4体環です。体環は主に体の前後端で縮小することから、不完全体節とも呼ばれます。

また体環は、グロシフォニ科の1体節3体環を基本とし、分類群によって分割の割合は異なり、第2～4次の分割までがあると考えられています。その表記の仕方はアルファベットと数字が用いられ、1体節3体環のものをa1・a2・a3、第2次の分割をb1・b2…、第3次の分割をc1・c2…、第4次分割をd1・d2…と表記します。ヤマビルの場合はa1とa3が第2次の分割を起こしているため、b1・b2・a2・b5・b6として表記します（図1拡大図、参照）。

つづいて吸盤についてです。多くのヒルは口吸盤（前吸盤）と尾吸盤（後吸盤）の2つの吸盤があり、口吸盤は頭部に位置します。吻蛭目の口吸盤は円盤状の形状をしており、吻無蛭目



図2 ヤマビルの口吸盤

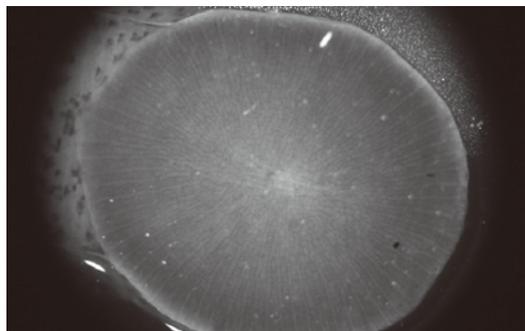


図3 ヤマビルの尾吸盤

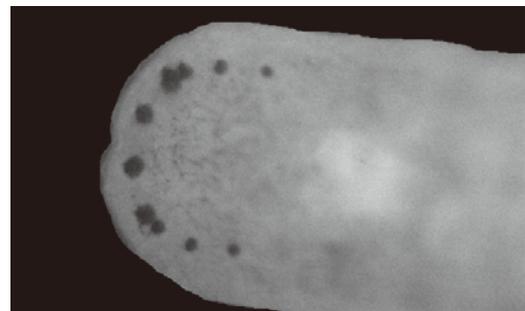


図4 シナノビルの眼 黒点が目

は三角形の椀状をしています。例えば、吻無蛭目に属するヤマビルの口吸盤は図2のような形状をしています。尾吸盤はX×VIII～X×XIVの7体節が融合して形成されたもので円盤状をしており、摩擦条と呼ばれるスジが確認できます（図3）。

眼の数は分類群によって異なり、シナノビル（図4）では5対10個確認できます。眼の他に眼点を持つヒルがあり、ウオビル科の仲間は尾吸盤の周辺に10個以上の眼点を持ちます。

肛門は尾吸盤の背面側に開口しており、糞を排出します。その他の排出器系としては腎管孔が各体節に位置しています。生殖器については雌雄どちらも備わっており、雄生殖器と雌生殖器が腹面に位置します。